

データサイエンス スマートシティ構想

ブランディング キャンパ リニューアル

医療インフラ

経済

ビジョン

IoT

総合大学

多様性

看護



韓学長 特別インタビュー

「総合大学化する下関市立大学の挑戦」

interview by 学生広報スタッフ：公共マネジメント学科3年 山中 望、堀尾美紗希

【学生】 総合大学化に向け、2024年にデータサイエンス学部を新設する準備をされていると伺いました。設置の理由や背景など伺えますでしょうか。

【学長】 例えば、年齢や性別などに応じて購入する商品は変わりますから、どういう利用者が多いのかによって、お店が置く商品のラインナップも変わりますよね。そのようにビジネスチャンスは、様々なデータを分析することから生まれるわけです。IoTが普通に装備される時代になり、情報を共有することがエネルギー問題やビジネス課題の解決に繋がるように、ITが都市発展の重要な鍵になるのではないかとされています。別の大陸に住み、お互いの存在を知らない時代から、長い時間をかけてシルクロードを踏破したり、何か月も船に乗って新大陸をめざす時代を経て、今は距離的、空間的に離れていることの意味がなくなってきました。みなさんも毎日世界中とつながっていますよね。私が知っている会社は、本社を山の中に移し、社員は田舎で豊かな生活をしながら、仕事は全てオンラインで行い、とても生産性を上げています。さらにメタバースという新しい世界が生まれてきました。仮想空間は膨大なデータで成り立っていますから、実世界とオンライン上の世

界という区別があいまいになってくると、データのもつ意味や価値をひも解くデータサイエンスの重要性はより高まります。データサイエンスは私たちの生活そのものや都市の未来を大きく左右する可能性を持っています。

一方で、少子化が進み、多くの小中学校が統廃合を余儀なくされている現実もあります。大学が将来的に発展していくために、新学部は新しい武器となり得ます。

スマートシティをめざす下関市において、データサイエンス人材は欠かせません。下関市の未来を変え、発展していくため、そして、市とともに大学が発展するため、データサイエンス学部設置の準備を進めています。

【学生】 「データサイエンス」とは、そもそものようなことを学ぶのでしょうか。また、そこで学んだ学生は将来どのようなフィールドや産業で活躍できますか。

【学長】 私たちの日頃の生活全てに関わることですが、課題を見つけて、情報を集め、それを分析して、新しい知見を見出す、つまりソリューションを見出すこ

と、これがデータサイエンスだと思います。例えば私たちの日頃の行動は、データ化されなければどんどん忘れられていきます。いろんな出来事をデータ化することで、なぜこういうことが起きたのか原因を探り、ソリューションを見つけることができます。それが人間にとって利益になるわけです。原因のない結果はありません。その原因を突き止めるのに、データは強い武器になります。人間にとって有益な因果関係を形にしていく、それがデータサイエンスなのではないかと思います。

いい材料で、いい商品を作って世に出せば、結果はついてくるという時代が過去長く続きました。しかし、それだけでは難しいのが現在です。マーケットを分析し、戦略を考えないと商品は売れません。ひとつの商品を売っていくにもデータサイエンティストが求められる時代になってきました。データを分析することによって、明確な原因をつきとめて、ソリューションを作り出す。その力を身につければ、あらゆる分野で、あらゆる産業で活躍できます。

【学生】 本学でデータサイエンスを学ぶことは、学生にとってどんなメリットがありますか。

【学長】 下関市がめざすスマートシティ構想の一端を、将来担うための学びができるのは、地元の学生にとって大きなメリットだと思います。未来社会では、データを扱う人たちとそうではない人とで大きな差ができると思います。また、大都市と違い下関市ぐらいの規模の街だからこそ有利な点もあります。下関市は、これからも様々な挑戦をしていくと思いますが、少し努力をすれば活動の場、いわばチャンスが巡ってくる可能性があります。下関市立大学の学生

が一生懸命頑張っていると、いろいろな人の目に留まり、「じゃあこういうプロジェクトに参加してみませんか」と、チャンスをもたらえるケースがあります。同じように頑張っている大学生がごまんといる大都市ではそうはいきません。そういう意味では、この街が持っているポテンシャルと結びついて、その他の地域から来る学生にとっても、下関市ならではのチャンスを利用できるというメリットがあります。

【学生】 2025年の予定で看護学部も設置構想中だそうですが、その背景や経緯についても伺えますでしょうか。

【学長】 海外で医療サービスを受けようとする、1か月後に来てくださいなどと言われることがあります。それだけ保健医療体制が整っていないということなんです。将来的にその街に住むかどうかを考えると、医療インフラはとても重要で、整っていないと不安ですよ。実は今、世界的に看護師が不足しています。当然医師も必要ですが、病院で医師が一人でも、看護師は結構な人数が必要になります。高齢化が進む中、安定した医療サービスの提供が下関市の課題になるでしょう。安定的に医療サービスが受けられるよう、本学で看護学部を設置し、看護師を養成したいと考えています。

4年制看護学部は、私立大学の場合、年間の学費がおおよそ150~200万円ぐらいかかります。それが、国公立大学なら53万円ぐらいです。本学が4年制看護学部を設置すれば、関門地域で看護師を目指す学生やご家庭には大きなメリットになりますし、地域の看護師を送り出すことは、下関市にとって大きな強みになります。



未来の都市発展の鍵は、3つあると考えています。ひとつはエネルギーです。何をしようとしてもエネルギーは必要です。もうひとつがIoT、そして最後のひとつが医療インフラです。下関市の大きなビジョンのもと、この中のふたつに関わる人材を養成し、街の発展に寄与するために新学部設置の準備を進めています。

【学生】 これまでは経済学部の単科大学でしたが、新たに理系の学生が増えると、キャンパスの雰囲気も変わりますか。

【学長】 ガラッと変わるでしょう。僕は医学部で博士号を取ったんですが、先輩は看護師が多かったんですね。看護学部の学生は、夜遅くまでめっちゃくちゃ勉強しますよ（笑）。

うちの大学は、全国で約300校の高校から進学してきます。各地域から進学してくるといろんな文化や考え方があって、結構多様性があると思いますが、それが3学部になると、さらに多様性が高まるんじゃないかなと思います。多様性は力を生みます。人間というのは、それぞれが違う個性を持っていますので、お互いができることで力を補完しあって集団が強くなります。今は多様性にあふれている社会が強い時代です。総合大学となり多様な学生が入ってきて、多様性あふれるキャンパスにはさまざまな可能性が生まれる、チャンスが生まれることで、大学自体が強くなるということを期待しています。

これを機に、キャンパスも変わります。まず、新しい校舎ができます。そして厚生会館2階の談話スペースが生協さんによってリニューアルされる予定です。また、学内には植栽やベンチなどを配し、学生が心地よく過ごせる空間にしたいと思っています。キャンパスらしいキャンパスにしたいと思っています。

【学生】 最後に、下関市立大学の今後の展望をお聞かせください。



【学長】 例えば「うちは素晴らしい〇〇を作っている会社」だけでは、だめなんです。「うちは世界大会で優勝した〇〇を作っている会社」というと、イメージが変わります。ブランドが生まれ、従業員たちも、「うちは世界的なものを作っている」とプライドを持つわけです。そのような組織は成長します。最初から大きいものは、実はありません。人々がそういうふうにして頑張ったからこそ大きくなるんです。魯迅という中国の文学者は「故郷」という短編小説の中に「もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」と書いています。下関市立大学は、「公立大学だから」というだけでなく、下関市立大学だけの色を作ったり、戦略を持ってブランド価値を高めていく作業がこれから必要です。10年後20年後に、「日本には下関市立大学があるよね」と世界で認められるような、そんな大学にしたいなと思っています。大学が世界で認知されるためには、優秀な人材を出す、いろんなところで活躍する人材を出すこと。もうひとつは優秀な研究をして世界に出すこと。このふたつなんです。ですから、大学のブランドを高めるため、優秀な先生を確保しようと私達も頑張っていますが、みなさんも卒業後、大活躍してください。就職したら終わりではなくて、就職した会社と大学が連携できる部分は連携するような、そういう仕組みも作りたと思っています。お互いに頑張りましょう！

学長とお話できる機会はあまりないので、とても緊張しましたが、豊かな知識ととてもきさくな雰囲気でお話を伺っているのがとても楽しかったです。私たちががんばります！
本日はお忙しい中、お時間をいただき本当にありがとうございました。

学生広報
スタッフ